



Data 2022-35

監督・脚本：ラナ・ゴゴベリゼ
出演：ナナ・ジョルジャゼ／グラン
ダ・ガブニア／ズラ・キプシ
ゼ／ダト・クビルツハリア

👁️👁️ みどころ

今のウクライナの“戦況”は、かつてのジョージア（グルジア）と同じ。79歳の誕生日を迎えた女性作家エレネには、ソビエト連邦下での悲惨な記憶がいっぱい。

ところが、新たに同居を余儀なくされた娘の姑ミランダはソ連邦時代の栄光を忘れられない女だから、やれやれ。こりゃ、ストレスが溜まるばかり……。

「金の糸」とは日本の“金継ぎ”の技法に着想を得たものだが、それってナニ？それを理解できれば、まさに人生はこれから！昔の恋人との電話を“元気の素”にしなが、人生をあくまで明るく！前向きに！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ジョージアの至宝！この91歳の女性監督に注目！■□■

91歳にして、監督50周年となり、作品40作目となる『クライマッチョ』（21年）を発表した米国のクリント・イーストウッドもすごいが、“ジョージアの至宝”ともいうべきラナ・ゴゴベリゼもすごい。彼女は1961年に映画監督としてデビューし、10本の作品を作ったが、ソ連邦の崩壊後は政府の各種要職を歴任していたため、監督業は封印。そんな彼女が91歳にして27年ぶりに監督・脚本したのが本作だ。

先日鑑賞したケネス・ブラナー監督の『ベルファスト』（21年）は、“自伝フィクション（オートフィクション）”だったが、本作の主人公である79歳のエレネ（ナナ・ジョルジャゼ）もラナ・ゴゴベリゼ監督自身を投影しているから、自伝フィクションである点は同じだ。

ロシアによるウクライナ侵攻以来、首都のキエフの他、東南部のマリウポリやドネツク、西部のリビウ等の都市の名前が有名になったが、エレネが娘夫婦と一緒に住んでいるのは、ジョージアの首都トビリシの市街地だ。

■□■ ジョージア VS ロシア。エレネ VS ミランダ ■□■

ロシアによるウクライナ侵攻から既に一カ月。その報道の中で、あらためて“検証”されているのが、1991年のソ連邦崩壊以降のロシアとジョージアの関係。ジョージアの前身は、グルジア・ソビエト社会主義共和国（グルジア SSR）で、ソビエト連邦を構成する15の共和国のうちの一つだった。ジョージアは1991年のソビエト連邦の崩壊以来、ロシア支配からの脱却を図り、欧米に接近する政策をとってきたが、2008年のロシア・ジョージア戦争以降、両国は断交している。

他方、本作の主人公は娘夫婦と同じ家に住み、小説『野の花』を執筆中の79歳の女性作家エレネ。本作の物語は、ある日、アルツハイマーの症状が出はじめた娘の姑であるミランダ（グランダ・ガブニア）がその家に引っ越してくるところからはじまっていく。ミランダはジョージアがロシアと共にソ連邦の一部だった時代に政府の高官を務めていた人物で、今もなおその時代の栄光を忘れられないらしい。エレネやその両親がソ連邦時代にどんな迫害を受けたのかは本作では語られないが、ミランダのような女性はエレネにとって実に鬱陶しい女。そして、娘はエレネの79歳の誕生日を覚えていなかったばかりか、誕生日にそんな嫌な女との同居、というとんでもないプレゼントを！ジョージア VS ロシアは国と国の関係が大変だが、エレネ VS ミランダという高齢の女同士の関係も大変だ。

中国には、“四合院”という独特な家の構造があるが、トビリシでも、旧市街地の古い石畳から一歩中に入ると、中庭を囲むように古い木造の集合住宅がある。住人たちは、中庭を囲んでいまだ人情を感じさせる付き合いをしているわけだ。エレネはそんな環境下で今日まで娘夫婦や近隣住民と仲良く暮らしていたのに、そこにミランダが入ってくると、それまでの平穏はハチャメチャに……？

■□■ 79歳のエレネはかつての恋人アルチルと何を語るの？ ■□■

ウクライナの戦況は、侵攻から1カ月を経た今、ロシア側の誤算、劣勢が明らかになっている。しかし、同時にその分だけ、ウクライナ東部の都市マリウポリの悲劇は強まっている。ジョージア（グルジア）は、かつてロシアを相手に今のウクライナと同じような“戦争”を経験したから、79歳になったエレネの過去にはさまざまな辛い思い出があるはずだ。

しかし、ラナ・ゴゴベリゼ監督は、本作でそれをエレネにストレートに語らせることはせず、かつての恋人アルチル（ズラ・キプシゼ）から誕生日を祝う電話が入ってくるといふ設定の下、2人の会話を通じてそれを語らせている。したがって、その情報は直接的ではなく間接的だし、正確ではなく極めて情緒的。かつてのジョージアの戦争に詳しくない私たち日本人にはわかりにくい会話ばかりだ。しかし、脚が悪くて外出もままならず、杖に頼って歩くエレネと、既に車椅子状態になっているアルチルとの会話は決して暗くなく、ユーモアたっぷりで前向きな姿勢を忘れていないから偉い。恋人同士だった2人は石畳の道で朝までタンゴを踊ったそうだが、そんな若き日の記憶を蘇らせながら2人は一体何を

語り合うの？

お互いに孤独なのは仕方ない。エレネには娘夫婦に対する不満やミランダに対する不満がいっぱいあるから、アルチルとの電話はうっぶん晴らしのいい機会。しかし、それだけに費やすのはもったいない。本作では、そんな決して楽しくはないが、人生の深みに満ちた2人の会話をじっくり味わいたい。

■□■タイトルは日本の“金継ぎ”から着想！その意味は？■□■

中島みゆきの名曲の一つに『糸』があるが、『金の糸』って一体ナニ？日本には割れた陶磁器を継ぎ合わせる“金継ぎ”という技法があるそうだが、本作のタイトルはそれに由来するらしい。つまり、「つらい過去も財産と考え、破壊せずに継ぎ合わせ、未来へ向いて乗り越える。」というものだ。なるほど、なるほど。

つらい過去をいっぱい持ち、79歳の今なお“ミランダとの同居”という嫌な境遇を強いられても、エレネは弱音を吐かず、あくまで未来を向いて乗り越える。そんなエレネの生き方は、ラナ・ゴゴベリゼ監督自身を体現しているはずだ。そして、そんな生き方を実践していると、アレレ、アレレ・・・？杖をつき、つらそうに歩いていたエレネだったのに、今杖を外した彼女は、『ウエスト・サイド・ストーリー』（21年）で見たダンスのような見事なタンゴを・・・？

私は、金継ぎの技法を知らなかったが、それを体得すればこんなに自由に、かつ前向きに！スターリン時代に両親が逮捕されるという悲劇的状况の中でも陽気に生き延びたジョージアの人々には、民族の喜びの才能があるらしい。本作では、それをしっかり確認したい。

2022（令和4）年3月31日記